

発行所

一般社団法人 埼玉県電業協会
〒336-0031 さいたま市南区
鹿手袋4-1-7(建産連会館内)
TEL 048(864)0385
URL <http://www.saidenkyo.jp/>
E-Mail kyokai@saidenkyo.jp

彩の耀

さいのかがやき

第

169号

平成25年10月15日発行

発行人 荻野勝治

編集人 広報委員会
(委員長 町田浩征)

編集 日本工業経済新聞社
(埼玉建設新聞)

災害復旧対策で講習会 70人参加し熱心に聴講

9月13日にさいたま市南区の建産連研修センターで関係者約70人が集まり、災害復旧対策講習会を行いました。講習会は①埼玉県の防災対策について②震災に強い都市づくり③災害時の実働について-の3部構成。第1部は県の危機管理防災部消防防災課から、第2部は県都市整備部都市計画課から講師を招き、それぞれ45分程度の時間を使い講義。第3部の災害時の実働体制については古小高収事故防止対策委員会委員長が説明しました。

講習に入る前に荻野会長は「県と災害協定を締結している我々は常に『まさか』に備えておくことが必要です。事故防止対策委員会が中心となって本日の準備を進めていただき、感謝に絶えない。本日たくさんの方に集まっていただきましたが、是非今日の講習会を実りあるセミナーにしていきたいと思います」と語り、災害に備える事の大切さを訴えていました。

また県の安藤宏消防防災課長が「災害については想定外という言葉は許されない。県は集まる情報を関係機関へ提供して、迅速な災害復旧活動を推進しなければならない。このためにも電気の復旧に関して点検業務を協会が担当してくれることになっており心強い」とあいさつをいただきました。

第一部の埼玉県の防災対策については消防防災課の小山省吾主幹が、東日本大震災の被害とその後の取り組み、県の災害対応体制などについて解説。災害対策本部の初動フローや地域防災計画の見直しについて説明しました。

第2部の震災に強い都市づくりについては県都市計画課の栗原智主査と吉野大輔主事が、都市災害の特徴や県の震災への備え、身近な対策などについて解説していました。

最後に協会から災害時の実働体制について説明を行い、講習会を終了しました。



70人が参加して行われた災害復旧対策講習会

平成25年度安全大会を開催 全社を挙げ安全を再確認



あいさつする島村副会長

7月3日に建産連研修センターで今年度の安全大会を開催しました。大会には会員企業の工事部門責任者らを中心に会社役員らも数多く出席、全社を挙げて労働災害防止に取り組む姿勢を再確認しました。

冒頭、島村光正副会長があいさつに立ち「夏を迎えるにあたり熱中症にも気を配らなければならないし、墜落転落災害など日頃から安全意識の高揚と安全活動定着を意識しながら作業に取り掛からなければならない。本日参加していただいた皆様が会社に戻り、中心となって安全を再認識し、災害防止に取り組んでいただきたい」と、全社を挙げて労働安全に取り組む切っ掛けとして欲しい、と呼び掛けていました。

埼玉労働局の星野定美健康安全課長が安全衛生に係る埼玉労働局長表彰式と重なってしまったため、あいさつ文を古小高収事故防止対策委員会委員長に託し代読。「電業協会の方々においては①墜落・転落防止②感電防止③熱中症の3つの防止対策をしっかりと立ていただき、労働者が安心して働くことが出来る職場環境の確保をお願いしたい」とゼロ災害を呼び掛けていました。

安全講話では、富士火災海上保険の斎藤孝行氏が「労働災害の現状～災害の原因分析と安全対策～」と題しパワーポイントを用いながら、4つの企業責任や公衆災害などについて約1時間に渡り解説しました。

最後に今年の全国安全週間スローガンを全員で唱和し、安全大会の幕を閉じました。



参加者全員で安全スローガンを唱和

「彩の耀」に寄せて



さいたま市市章



さいたま市の頭文字「S」をモチーフに、未来に向かって人もまちもいきいきと前進するイメージのデザインです。「S」を囲むように弧を描くことで、市民を暖かく包みながら共に発展していくこと、輪(和)が広がり融和していくことを表現しています。基調となる緑色は、見沼たんぼに代表される豊かな自然との調和を示しています。

さいたま市長 清水 勇人

一般社団法人埼玉県電業協会の皆様におかれましては、常日頃、電気工事における調査研究や資料の収集、各種講習会や研修会の開催など、本市をはじめ県内各地域における電気工事の「技能の向上」と「能率の増進」に努められ、電気設備産業の適正な運営及び健全な発展、並びに社会生活の安定と社会福祉の向上に寄与されていることなど、多大な御貢献をいただいておりますことに、重ねて感謝を申し上げます。

さて、私は、市長就任以来、約800ヶ所の現場を訪問して、多くの方々のご意見を拝聴し、市政運営の参考とさせていただきました。また、「しあわせ倍増プラン2009」及び、「行財政改革推進プラン2010」に掲げた事業について、おおむね9割を達成することができました。

しかしながら、長引く景気低迷、東日本大震災の発生、少子高齢化など社会を取り巻く環境は刻々と変化し、待機児童の解消、公共施設の老朽化、新エネルギーの創出等の新たな課題が顕在化し、これらに迅速かつ適切に取り組む必要が生じています。政府の金融政策、財政政策により、株価の上昇など、日本経済に明るい兆しは見えるものの、これからの5年、10年は、さいたま市の将来にとって極めて重要な時期であると認識しています。

そこで、私は、さいたま市が、住んでいることが誇りに思えるようなまち、「しあわせ実感都市 選ばれる都市」となっていくことを目指して、5つの柱を基本としたまちづくりに取り組んでまいります。

一つ目は、「東日本の中枢都市構想の推進」です。

さいたま市の強みのひとつであります東日本の交通の要衝という特性を活かし、より高度な都市機能を集積することにより、東日本の中枢都市として市民が誇りに思えるまちづくりを推進してまいります。

二つ目は、「日本一の安心減災都市づくり」です。

大規模地震などの自然災害に対して、人的被害、経済被害を軽減するため、インフラや公共施設の耐震化、災害時などの情報基盤の整備などに取り組み、誰もが安心・安全に暮らせる災害に強いまちづくりを推進してまいります。

三つ目は、「日本一の教育文化都市を実現」することです。

次世代のさいたま市を担う子どもや青少年が、夢や希望に向かってたくましく生きていく力を育てるため、市立高校改革として、中高一貫の中等教育学校の新設、いじめ、自殺防止対策として「心のサポート事業」の推進など様々な取組を実施します。また、文化芸術都市創造条例を活かした、さいたまトリエンナーレの開催などにより、日本一の教育文化都市を実現してまいります。

四つ目は、「環境未来都市の実現」です。

太陽光・小水力・ごみ・バイオマス発電などのクリーンな「再生可能エネルギー」の導入・普及を促進するとともに、「次世代自動車・スマートエネルギー特区」に関する取組を推進します。また、首都圏に残る本市の財産である見沼たんぼをはじめとした豊かな自然と共生し、地球環境に負荷の少ない環境未来都市を実現してまいります。

五つ目は、「健幸都市づくり」です。

すべての市民が健康を維持し、自立して暮らすことができるように健康づくりや介護予防に取り組む、また、病気になっても住み慣れた地域で、質の高い医療サービスが得られるよう、小児・周産期医療や救急医療などの充実・強化を図り、誰もが健康で幸せに暮らせる「健幸都市」を実現してまいります。

さらに、本年10月26日(土)には、自転車ロードレースの最高峰「ツールドフランス」の名を冠したレース「さいたまクリテリウム by ツールドフランス」を開催し、さいたま市を世界に向けて発信していくとともに地元の経済活性化にも繋がるものと大いに期待しているところです。

このことは、都市イメージの構築に資するとともに、経済効果等による地域の活性化、本市が国内はもとより世界から注目されるよい機会となります。

さいたま市が選ばれる都市に、そして希望と絆にあふれるまちになるよう、全力で取り組んでまいりますので、皆様からのより一層のお力添えを賜いますよう、お願い申し上げます。

結びにあたりまして、一般社団法人埼玉県電業協会のますますのご発展と、会員の皆様のご健勝、ご活躍を祈念いたしましてご挨拶といたします。

技術育成

耐震施工での注意点を確認 第1回技術講習会

事業主要



あいさつする荻野会長

7月11日にさいたま市南区の建産連研修センターで「建築電気設備の耐震設計・施工マニュアル」をテーマにした今年度第1回目の技術講習会を開催しました。

開会に先立ち荻野会長が「我々のような企業が存続するためには、優れた技術と経営手腕が必要と言われています。両輪の1つである技術向上のために、今回の講習会が企画されました。電気工事のことは当協会会員に任せておけば大丈夫

と言われるよう、非会員との差を広げるため、ひいては会社のため皆さんのために勉強してください」と参加者にエールを送りました。

講習はAS技術士事務所の角耀(すみ・あきら)氏が①地震のメカニズム、地震用語、過去の地震の実態②耐震設計、耐震施工③地震による電気設備機器の被害例、南海地震の予測ーについて分かりやすく解説していました。



建築電気設備の耐震施工について勉強

資格取得

正しい知識と施工を あと施工アンカー講習会

事業主要



小林技術研究委員長

8月2日に建産連研修センターで「あと施工アンカー講習会」を開き、会員企業から26人が参加しました。今回のセミナーは技術研究委員会主催によるもので、公共・民間ともに建築物の改修工事が本格化する夏を前にして、実務に沿った研修内容となっていました。

小林技術研究委員長は座学を前に「震災のほか笹子トンネルの天井施設落下事故などにより、あと施工アンカーの施工方法と安全性確保に対して厳しい目が集まっている。また、

改修工事が昨今増えており、仕事柄アンカーを打つことが多いと思う。正しい知識に則った正確な施工で、検査の時などにアンカーについて質問された場合でも、しっかりとした対応が出来るようになって欲しい」とあいさつしました。

研修は約2時間の座学の後、駐車場に用意されたコンクリートブロックに数種類のアンカーを実際に打ち込み、コツを掴んでいました。



アンカーを実際に打ち込む受講者

企業対策

無保険問題など解説 第1回企業対策セミナー

事業主要



あいさつする島村副会長

8月9日にさいたま新都心の男女共同参画推進センターで、入札契約手続きなどをテーマとした今年度第1回目の企業対策セミナーを開きました。今年は建設業界全体の課題として巷をにぎわしている社会保険未加入問題を取り上げ、会員がしっかりと対応が取れるよう詳細な説明が行われました。

研修に入る前に島村副会長が「今年は社会保険未加入問題というテーマを追加し、3部構成のセミナーとなりました。

我々の入札環境は変化しており、研究を怠るとついていけない。協会に加入していて良かったと実感できるよう、今後も役立つセミナーを企画し続け、皆様の受注拡大に寄与していきたい」とあいさつしていました。

第1部セミナーは①入札契約手続きの実施方針②関東地方整備局管轄部における入札状況について、国土交通省関東地方整備局管轄部から寺田官庁施設管理官が約1時間30分ほど説明。第2部では県建設管理課の祝主査が総合評価ガイドライン改定等について、第3部では県建設管理課の茂木主査が社会保険未加入問題についてそれぞれ1時間の持ち時間で解説しました。

技術育成

1級実地の受験準備講習 19人が実地対策指南

事業主要



小林技術研究委員長

9月から10月にかけて3回に渡り1級電気工事施工管理技術検定試験(実地試験)の受験準備講習会を開催しました。第1回目の講習を9月19日に建産連研修センターで行い、19人が参加しました。全員合格を目指す小泉一夫講師(ケイ・教育企画サポート事務所)の受験対策指南を皆、真剣に受けていました。

冒頭、技術研究委員会の小林弥寿弘委員長が「1級電気工事施工管理は電気工事会社にとって重い資格です。将来独立するにしても、特定建設業の専任技術者として働くに

しても大切な資格ですので、何としても3日間頑張ってください」とあいさつ。

講習では最初に1時間ほど掛けてオリエンテーション・ガイダンスを行い、施工経験記述、法令・施工管理、法令・用語の定義など模擬試験形式で徹底的に弱点などを克服。それぞれ回答の添削、採点・評価、個人別に指導を行い実地試験突破を目指しました。2回目の講習は10月2日、3回目は10月9日にそれぞれ行いました。

小泉講師は「ここに来ている1級の受験資格を持っている受講者の方たちは、会社でも重要なポストについているはず。将来、電気工事業界で仕事をしていく上で重要な資格ですので、是非とも実地試験を突破し資格を取得して欲しい」と語っていました。

平成25年度電気工事技術研修会

～電気設備プロフェッショナルによる伝習～を開催して

人材育成委員会 橋本 勉(橋電株)

人材育成委員会では、毎年春に技術系高等学校等を訪問し、進路指導担当者様と意見交換を進めて参りました。

その際、生徒へ実際の作業を見せ、進路選択の参考とさせたいとのご意見を多数いただきました。これに基づき、当協会会員が担当している改修工事の現場見学を含め、2年生の電気科主体とした研修会を延べ37名にて開催しました。(8月20日、県立浦和工業高校生徒13名、先生2名。8月21日、県立春日部工業高校生徒20名、先生2名。)

現場見学では、工事概要説明後に現場を案内。皆、現場代理人の説明に熱心に耳を傾け、真剣な眼差しで作業を見学していました。点灯試験の際、照明点灯と同時に笑顔になったのが印象的でした。また、学習している技術や用語が使われている現場を肌で感じ感激していました。

生徒からは「自分も現場監督になりたい」「貴重な体験有難うございました」との感想が寄せられました。生徒にとって自身の学舎が改修される作業を間近で見学できたことは大変興味深く、有意義な経験であったと思われます。

引き続き行った意見交換では、以下のような質問が

ありました。

①施工完了までにかかる平均的な工期は？②電気工事業の職に就いて良かったと思える魅力を教えて下さい③給料はいくらですか？といった具体的な内容もありました。

質疑応答後、当協会人材育成委員会で作成した「キャリアルート」リーフレットを使用して電気設備工事の職務内容・資格取得の必要性を説明し閉会しました。

研修会がこれから進路を選択する生徒にとって大変参考になり、貴重な情報提供の場となれば幸いです。

近年、建設業就業者の高齢化と減少が進行し、技術継承、技能者確保及び育成、特に若年層の入職促進が業界の課題となっています。

人材育成委員会ではこのような状況を踏まえ当業界に多くの優秀な人材を確保できるよう活動していきます。

研修会開催にあたり、県立浦和工業高校様、県立春日部工業高校様をはじめご協力を賜りました皆様に紙面をお借りして、心より感謝を申し上げます。

会 員 企 業 紹 介

野口電気工事(株) TEL 048-966-3380 FAX 048-966-6421

越谷市赤山町 3-200

企業モットー

当社は、平均37歳の若者の集団です。良く・早く・安く・安全にをモットーに日夜努力しています。

—employment data—

従業員数=8 女性雇用人数=1
高齢者雇用人数=0



川島電気(株)

TEL 048-251-6212
FAX 048-251-8623

川口市中青木4-12-3

企業モットー

お客様の望む物を電気設備の創造を通して提供し安全安心な社会造りに貢献しています。

—employment data—

従業員数=5 女性雇用人数=1
高齢者雇用人数=0



(株)関根電気商会 TEL 049-225-2291 FAX 049-223-3101

川越市鴨田2060

企業モットー

優れた技術と誠実な施工により、社会に奉仕し事業永遠の繁栄を図ります。

—employment data—

従業員数=49 女性雇用人数=7
高齢者雇用人数=4



(株)沼尻電気工事 TEL 048-584-4085(代) FAX 048-584-4049

深谷市黒田1690-1

企業モットー

安全で使いやすい電気をお客様に提供することをモットーに日々技術を研鑽してまいります。

—employment data—

従業員数=49 女性雇用人数=15
高齢者雇用人数=0



エコカーはどこまで進化するのか

ニチデン技術サービス(株) 箕輪 栄治

協会だより
東部支部

今やエコカーの代表といえばプリウスかな。

昨年3月にプリウスPHV（プラグインハイブリッド）を導入して一年半経過しました。

何と今までにない新鮮さ、そして実に画期的な機能、どこまでも伸びる燃費を体験していますのでここにその一部を載せてみます。（事前に断っておきますがトヨタの回し者ではありません）

行動範囲が25km圏内では殆んどEVだけで走れます。信号が多く、走行とストップの繰り返し走行ではガソリンの無駄が多くこれを完全にクリアできます。充電は毎日自宅の深夜電力。1φ200Vで90分で満充電！電気代は約33円。25km走行するのに33円は安いと思います。又携帯電話、スマートフォン、パソコンとの連携機能も充実しています。

次に燃費ですがHVで約25～28km/l、これにEV走行分がプラスされるので平均燃費はグンと伸びる訳です。今までの最高は53km/l、走行1700kmで給油32ℓでした。満タンで2000kmも充分可能です、これには驚きました。又、昨夏には電力供給型V2H搭載車も登場、災害時の長い停電には非常電源として役に立ちます。

そして今春もっと驚きのことが研究されていまし

た。プリウスに乗ったとたん警報音「心電図に異常あり」とナビに出て、すぐ病院へと指示。ハンドルに埋め込んだ電極に触ることで計測し、予兆を掴むそうです。こんなメディカルチェックが車で近い将来できるそうです。別名「命を守る車」だそうです。

唯一残念なのは外出先での充電装置の設置が不足していることです。あらゆる駐車場に設置されることを望みます。我々の仕事にもなるし、この車に出会ってからは常にエコ運転を通り越した考えるエコ運転を心掛けるようになりました。点検時にバッテリーのいたわりチェックでVERYGOOD!を目指して。毎回ハンドルを握るのが楽しくなります。まだまだ果てしなく未来を感じるプリウスPHVライフでした。



苦しいからこそ

内山電設(株) 代表取締役 内山 祥章

Voice

きつい。なぜ、こんな苦しいことをしているのだろうと、心が訴え続けている。激しい呼吸音が耳元に響き、心拍計が178を示す。体力の限界が近づいていると感じた。しかし、鉛となった足はペダルを回転させ続けている。雨上がりの透き通った空の中、木立の隙間から雲海が見える。フィニッシュは近い！気持ちを奮い立たせ、強くペダルを踏み込んだ。

私が友人の誘いを受け、6月2日に開催された「富士の国やまなし 第10回Mt.富士ヒルクライム」で完走することを目標にロードバイクを始めたのは約1年前になります。「Mt.富士ヒルクライム」とは富士スバルラインを利用し、富士北麓公園から5合目を目指す、標高差1270m、走行距離25kmを登る自転車レースです。参加者約6000人を申告タイムの早い順に14組に分け、順次スタートします。

心配された天候も回復し、肌寒い気候のなか14組目でスタート。急勾配が続く序盤をレース初体験者の私は、廻りのペースに合わせてしまい、オーバーペースとなる。気持ちを振り直し、比較的緩やかな2合目付近で同じペースの選手に着いて行くが、徐々に足が重くなる。しかし、3合目に差し掛かったあたりでランナーズハイなのか、無意識に足が快

調に回り始めた。針葉樹の間から周辺の山々が眼下に見え、フィニッシュは近い、行ける！と思った4合目手前で突然、足が回らなくなる。序盤のオーバーペースでスタミナが切れ始めたからだ。それでも、束縛された足を強引に回し続け、こんな苦しいこと、辞めてしまえ！と、悲痛な心の叫びを打ち消しながら、必死に駆け上がる。すでにフィニッシュした参加者たちの声援を受ける中、疲れ切った身体を鼓舞し、最後の急勾配を走り抜けた。

フィニッシュした瞬間、「やった！登った！登り切った！」と何度も繰り返し、つぶやいている自分がそこにいました。登り切った達成感と苦しみに耐えた充実感が限界を超えた身体に、心地良い疲労感をもたらしました。

この2時間8分の自分との戦いは貴重な体験となりました。苦しいからこそ何をすべきか、苦しいからこそ、乗り越えた先の素晴らしさを改めて考えさせられた1日でした。



8月

- 9月

- 10月

- 11月

- 12月

-